

『浅羽一春、いつもの春に見つかってしまおう』

〈恋春アドレセンスに続く短編〉

著者・八日なのか  
発行・エクレール

「なんだこのボロ屋は」

「新しいおうち」

「新しい？ 冗談はよせよ。どこからどう見ても築数十年はくだらない木造建築の物件じゃないか。玄関の扉が引き戸の時点でお察しだよ。ガラガラくただいまーバタバタバタッお帰り父さんお土産はー？ ……ってな具合で子どもたちが玄関までお迎えに来る光景が脳裏を過ぎったぞ」

「温かい家庭だねえ。理想の家庭像だよ。でも、ここは今日から私たちの愛の巣だからね？ ね？」

「まだ愛の巣だった方が幾分かマシだったと思うがな」

事前に聞いていたものとはだいぶ違った、ポジティブに捉えると趣のある家屋を見つめながら、押し気味に片腕に寄り添ってくる、仄かにこしあんの匂いがする幼馴染みを押し退ける。理想と現実とはかけ離れているものであるのが常ではあるが、もつと鉄筋コンクリート感がある物件がよかつたとかさういった話以前に、これから否が応でもここに住むことになるだろう俺にとって、もつとも憂慮すべき事柄はまったく別な所にあった。

「お邪魔しますん」

「その語尾に『ん』を付けるのをやめろ。オマエの『ただいまーん』を幼少の頃から何百回も聞かされたせいで、今では帰宅の挨拶が少し卑猥なものに聞こえるようになってしまったんだぞ」

「それはよく『こ』って付け足してた幼稚なカズちゃんが悪いと思いますん」

「アンタたち、玄関前でなに中身のなくだらな会話をしているの？」

「姉上、ご無沙汰しておりますん」

先に述べた憂慮すべき事柄が、案の定ガラガラと昭和チックな音を立てて開いた引き戸の向こうに立っていた。とても来客を迎えるような、最低限整った格好とは言えない、というよりよそ様にお見せすることが憚られる格好の姉上こと、浅羽守祢が目を半開きにしたままご登場なされた。

「一春、ちよつと見ない間におつきくなつたわね。態度が」

「お言葉ですが姉上。わたくし、普段にないくらい丁寧な言葉遣いでいらつしやいましてからに「ちゃんと敬語が使えるようになってから出直すことね」

ううっ、わざと学のない振りをしているのに。やっぱり辛辣だよ、この姉。

「くんくん……カミ姉、くさい」

「叶衣、四六時中おまんじゅう臭いアンタにだけは言われたくないわ。いくら私が華も恥じらう年頃の乙女だといえども、朝シャンもしてない寝起きの体臭をくさがられても困るわ。でも、一春はむしろちよつとくさいくらいのお姉ちゃんの方が興奮するわよね？ いえ、しないはずないわ」

約三ヶ月ぶりほどに嗅いだ姉の匂いは、どこぞの妹の匂いよりほんの少しだけいい匂いがした。

\*\*\*

「ひとり暮らしの彼氏いない系OLのワンルームかって思うぐらい散らかってんだけど」

「妄想だけで例えるのはやめなさい、一春。底が知れるわよ」

「底が知れちゃったのはむしろカミ姉の方だと思っけどなあ……もぐもぐ」

「……なにアンタ、しばらく見ない間にトゲトゲしくなったわね？ おまんじゅうの摂取量足りてないんじゃない？」

「これからカズちゃんと私の愛の巣になるであろう我が家を、こーんなに散らかしちゃったカミ姉にはトゲトゲしくいきたい所存なのだよ」

むすっとした頬の膨らみはおまんじゅうのせいか、それとも嫉妬のせいか。おまんじゅう妖怪オサナナジミの結崎叶衣は、早くも我が物顔でこたつに潜り込んだ。

「まったくまったく、もう春だっというのにおこたを仕舞ってないなんて。初めての独り暮らしはそんなに自由自適だったの……ぬくぬく」

「私を責める前におこたから出てきなさい」

「……すぴー……すぴー……」

「新幹線でもあんなに寝てたのに、まだ寝るかこのナマケモノは」

「はあ、相変わらずね。私がこんなにもひとり暮らしに適応した人間になったというのに、アンタたちはホントにもう」

ただの墮落を適応とは言わないだろう……とは口が裂けても言えない。どうせこの姉のことだ、屁理屈捏ねて逆に俺の弱みを的確に攻めてくるだろう。沈黙は金なり、である。

しかし、居間と思われる十二畳ほどの広い部屋は、姉の私物で溢れかえっていた。他に部屋があるだろうに、居間を私室代わりにしてしまっているのが丸分かりである。

「ジロジロ眺めたって、お姉ちゃんのパンツなんか落ちてないわよ？」

「ある意味安心したぞ。下着ぐらいはしっかり片付けているんだな」

「いえ、家にいるときはノーパンだったからよ！」

「パンツぐらい穿こうよ」

「一春は下半身丸出しより、パンツ穿いての方が興奮する性癖だものね。仕方ないから、今日からは穿くことにするわ。感謝なさい」

「もう穿いてくれるなら、なんでもいいや……」

「……すぴー……むにやむにや……暑いよう……」

せつかく明日から新生活の始まりだというのに、加えて新居にまで来たというのに、オレの周りの人間はどうしてこう、おかしな乙女しかいないのか。

……新しいお友だちが出来るといいな、男の。

\*\*\*

「学園に来るのは入試以来だねえ、もぐもぐ」

「うっ……いやなことを思い出させるな」

入試とか受験とか、そういうしがらみからは解放されたのだ。また数年後に同じ目に遭うと分か

っているからこそ、せめて今は忘れていたい、そんな年頃だ。

俺たちの前にあるそれなりに整った校舎は『私立桜春学園』。今日からオレと叶衣が入学することになった学園である。昨日は、学園寮のひとつである『あずま荘』に引っ越してきた訳だ。本当はもっと綺麗で小洒落た学園の本寮に住むはずだったが、姉の権力により、勝手に変更されてしまったのは言うまでもない。

「また同じクラスになるといいねえ」

「間違いなく同じになるから。呪われてるから、オレたち」

「幼馴染み特有の絆の力だねん」

そんな美しいものでは断じてない。というのも、オレにはいろんな呪いがかかっている……と思う。そうでなくては、オレの青春はどこまで行っても異常で、歪で、気付けばまた人目を気にせずおまんじゅうを頬張る叶衣の横を歩いている。おまんじゅうの臭いと共にある青春なんてまっぴらごめんだ。人様の進路に口を出せるような人間ではないので、同じ進学先を選んだことについてはなにも口を出さなかったが、これからの学園生活は、せめて既存の人間関係とは離れて過ごしたい、というのがオレの僅かばかりの希望であった――。

\*\*\*

「あべもあべ」

「……………」

どうしてオレは叶衣とお昼ごはんを食べているのだろう。

先ほどの決意は春風と共にどこへ飛んで行った？

お揃いのお弁当箱、少しだけ量の違っておかず、ごはんの上のハートマーク。

「いや待て、ハートマークはダメだろ。許されないだろ」

「あ、それハートマークじゃないよん。反対から見たら桃のマーク」

「脈絡のない桃要素！」

「およよ？ お尻の方がよかったかな？」

思わず机を叩いて立ち上がってしまった。学食に行かず、オレたちと同じようにお弁当やパンなどを食していたクラスメイトたちの訝しげな視線が、オレをますますボツチへの道に引きずり込もうとしている。

「もぐもぐ……入学初日から、いきなり女の子とおそろのお弁当食べ始めたら、誰だつて近づいて来ようとは思わないよねえ」

「キサマ、謀ったな!!」

「いつもどーり、お弁当を要求して来たのはカズちゃんだよ」

「オレのバカ！ バカバカ！ もうバカ！」

激しい自己嫌悪。ウキウキワクワクの新生活第一歩目を盛大に踏み外してしまった自分へ戒めとして、自身を罵った。

「ねえねえ、チミたちもしかして付き合ってるの？」

「ああん？」

神聖なる自己嫌悪タイム中のオレに声をかけてきたのは、ごくごく平凡な見た目の女だった。ついつい初対面のクラスメイトに向かってガラの悪い声を出してしまったせいか、平凡な女は少し怯えてしまったようだ。

「こ、怖いよ！ そんな睨まなくてもいいじゃん！」

「ああ、悪かった。で、なんだって？ 彼女でもなんでもないただの幼馴染みといっしょにお弁当を食べていた罪のない無垢な一春くんに何か用か？ ああん？」

「やっぱり怒ってるじゃん!! おう変な勘違いするんじゃないよ……って顔でめっちゃ睨んでるじゃん！」

雨に濡れたチワワのような縮こまってしまった平凡な女子クラスメイトには悪いが、ここで妙な噂が立ってしまうとオレの青春は再びおまんじゅうによって浸食されてしまうのだ。是が非でも全力で否定しなければなるまい。

「私はいつでも結婚してあげるといふのに、もうっ」

「やっぱりそーゆー仲なの!!」

「叶衣ちゃん、その減らない口に」週間お外に放置してカッチカチになったおまんじゅうを突っ込まれたくなかったら、少し黙ろうか？」

「なんか卑猥！ 卑猥だよ、この人！ ホントにこんなのが好きなの？」

「おいコラ平凡。こんなのとはなんだ、こんなのとは」

「ダメな男ほど愛おしく感じるものだよ……もぐもぐ」

「ふむふむ、まだ私にはわからない領域だね。愛は深い！ うーむ」

どことなく満足げに頷く平凡女。うつとおしく絡んで来るなら、もっとわかりやすくかわいい女の子がよかったです、神さま。

「なんだこのかわいくもブサクもない面の女は」

「え、それって私のこと？ ねえ、もしかしなくても私のこと!!」

「カズちゃん……心のお口はしっかりチャックしとかないと」

叶衣がやつちまったなあと言わんばかりにため息をついている。かたや哀れ平凡女は、この世の終わりを見たかのような顔で、あわあわと口を震わせていた。挙げ句の果てには、オレのうっかり心の声を聞いていたであろうクラスメイト女子がひそひそと『あいつヒドクね?』とか呟いている。最悪だ……オレの心証が最悪だ……。

「キサマこの平凡女あ！ オマエが気軽に話しかけてきたせいで、オレの評価ダダ下がりだろうが！」

「えーっ?! 好き放題罵倒しといて、私のせいにするの!! 最低だよ！ 男の風上にもおけないよ！」

「まあまあ、ふたりとも落ち着いて。お昼休み終わっちゃようよ」

平凡女といがみ合うオレを叶衣が宥めようと間に入ってきた。

「こんな男好きになっちゃダメだよ！ 今からでも遅くないから、目を覚まして！」

「なんだとう!! オマエみたいに特徴のない上に、凡乳の女に言われたくないわ!!」

「凡乳ってなに!! もしかしておっぱいのこと!! おっぱいのことかー! 泉ちゃんの立派なおっぱいを指差して凡乳なんて! このヘンタイっ! うわーん!!」

「ぶへえ!!」

思いっきりオレの頬に平手を喰らわせ、泣きながら廊下に逃走した凡乳。

「あーあ、なーかした、なーかした。カズちゃんが女の子なーかした」

「もうヤダ……」

「カズちゃんよう。全部自業自得なんですぜ?」

知った顔で黄昏れる叶衣から目を逸らす。そんなことは分かっている。だからこそ、うんざりしてしまふ。新生活に意気込んでいたとはいえ、初対面の凡乳にあそこまで言う必要はなかった。あとで謝ろう。

「お姉ちゃんはEカップもあるんだから! 泉ちゃんもそのうちEカップだから! おつきくなるんだからね!!」

「……本当にすまんかった」

なぜか廊下から戻ってきて自身の胸の成長を遺伝を理由にアピールしてきた泉とかいう凡乳とは、このあと叶衣と三人でいっしょにお昼ごはんを食べ、和解したのだった。

\*\*\*

「叶衣、オレの半径10メートル以内に近づくな」

放課後、さも当然かのような顔で一緒に帰ろうとしてきた叶衣を牽制する。

「えー、私巻き尺じゃないんだから、そんな細かい距離感掴めないよお」

「なら、せめてオレの目の届かないところでまんじゅう食ってろ」

「なんだいかズちゃん、今さら反抗期かい？ 幼馴染み反抗期なんて誰も得しないよ？」

「損はしているな、確実に。主に人間関係の方面で」

「そうやってちよつとの自尊心と羞恥心が芽生えてきたからって可愛い幼馴染みと疎遠になって、数年後ぜーったい後悔するんだよ？ 独り身で、お正月に幸せそうに家族を連れて帰省している姿をお隣で目撃しようものなら、悔恨の念で身が貫かれる思いをするはめになるんだよ？」

「ははっ、どーせオマエみたいなおまんじゅう星人をもらってくれる奇特な野郎なんざこの星にはいないから、最悪オレが生き遅れたらオマエで勘弁してやんよ」

「あ、今の言質取ったから。三十路越えたら私と結婚ね？ うん、決まり！ もぐもぐ」

「……………」

悪辣な返しにも動じず、悠然とおまんじゅうを頬張る叶衣。ポジティブであるように見えて、将来の幅をこの上なく狭めているこいつとは、互いのためを思っただけの距離を置くべきである。

「オマエもな、少しは周りに目を向けるべきだと思うぞ？ 自分でこういうのもなんだが、オレよ

り、いい男なんて片手の指で数えられるくらいこの世にはいるんだ」

「ずいぶん少ないんだねえ。少子化どころじゃないよお」

話が進まないのです、以降叶衣のツツコミは無視して続ける。

「ともかく、だ。新しい生活を前に、俺たちはもつと他の種族と交流を深めるべきなんだと思う」  
「私たちは、宇宙人かなにかなの？」

「狭い世界で生きてたって俺たちの将来は明るくならない。選択肢は多い方がいいんだ。ほら、この学園にはこんなにも有象無象がひしめいているだろう？ 数打ちや当たるの精神で、適当に声かけて仲良くなってみるのもいいじゃないか」

「ナンパ師みたいなこと言うんだねえ」

「さあ、恐れず前を向いて行こうじゃないか！ この手のひらに掴めるだけ、友達の輪を広げてみせる！」

「あれ、ずいぶん語ったわりには最初の目標小さくしたね？ 現実もちゃんと見えているんだね、

感心感心」

「……さっきから人ごとみたいに言いやがって」

毎日まんじゅう食ってるだけの人生のくせに、オレよりはるかに達観している叶衣に耐えきれなくなつて、つい言い返してしまった。その善し悪しを度外視すると、人生観の成熟度だけで言えば、オレは叶衣に負けているのだ。

「カズちゃん御託はいいから、さっさとかわいい女の子に声かけて、帰ろうよう」

「女はもういい！ オレは男友達が欲しいの！ もっとアホでバカらしい日常会話がしたいのお！」

くだらないことで笑え、一緒にバカやって叱られ、無言でゲームしてるだけでも楽しめる男友達が欲しい！ おまんじゅうとか淫妹とか、もうヤダ！ 女の子でも、仲良くなるならももつと清楚で可憐な年上の子がいい！ ついでにおっぱいとお尻が大きければ――。

「……っ!!」

己の欲望を心の中で発露していたまさにそのとき、ふと仄かに甘い香りが風に乗ってオレの鼻腔をくすぐった。

黒い長髪がふわりと広がり、どこか気怠げな眼差し、すらりと伸びた肢体は白いニーソで光っていて、どこか気品を感じられる。

まさにオレの理想を体現したかのような美少女が目の前を通り過ぎる。

「わあ、美人さんだねえ」

叶衣も思わずおまんじゅうを食べる手をとめて見惚れている。

この衝撃的な出会いは、オレの青春の第一歩となる運命だと直感的に悟ったオレは強張る両手を握りしめ声をかけようとしたそのとき。

びゅううう、と春風がそよいだ。

「きやつ!!」

黒髪美少女のすぐ隣から、まるで乙女のような悲鳴があがる。

偶然にも、オレの視線はその悲鳴の方向にあり、かのマリリンもびっくりなくなり見事に翻ったスカートの中身を目撃してしまった。

「淡いピンク……」

「ピンク好きなん？」

好みを呟いたワケではないと、幼馴染みに苦言を呈すのも憚られるようなパンチラに思わず啞然としてしまう。

「もおー、やだあ……こんなときに限ってタイツはいてないなんて！」

パンモロの主がスカートの裾を抑えながら、忌々しげにぼやく。

ようやく上半身に目がいったのだが、おそらくEカップはあるう胸、なーんか既視感はあるものの、整った部類に入るであろう顔立ちがそこにはあった。

「茉莉、もっかい」

「は？」

「きゅーちゃん見てなかったから、もっかい」

「私は春風の精じゃないの！」

「むう……私としたことが、花粉ごときにラッキースケベのチャンスを邪魔されるなんて」

「わっ、ちよつと、鼻水！ 鼻水かみなさいよ！」

「すびびびび！ ……はあ、これが美少女の鼻水なら吸い込みまくるのに」

「春は変態の季節だっていうけど、アンタちよつと自重しなさいよ？ せつかく見た目はお嬢さま

らしくてモテるのに」

「女の子はちよつと鼻水垂らしてるくらいの方がモテる」

「ないない」

何事もなかったかのように雑談しながら校庭の方へと消えていく先輩？二人組。

「……カズちゃん、声かけるんじゃないの？」

「……いや、オレの第六感がアレはやめとけと激しく震えるもので」

「ヘタレだねえ。まあ、美人さんだったし、しょうがないっか」

オレの声かけが失敗したに、どこかうれしそうにおまんじゅうを頬張る叶衣に嫌味を言う余裕もない。

確かに、あの二人には新しい出会いを感じたがそれ以上に、オレが生まれたときから苛まれていると言っても過言ではない女難の相が色濃く感じられた。

「あ、ちよつと！ その新入生くん！」

「は、はい？」

ぼけつとしてしていると、先ほどのパンモロの主があることか向こうから声をかけてきていた！

「み、見たでしょ……？」

「なにをですか？」

「ほらその、なんというか……布切れっぽいのを」

「まあその、ちらつと……」

「やっぱり!! きゅーがニヤニヤ見てたからもしやと思ったら!」

「すみません、たまたま目に入ってしまって」

「あーその、べつに謝って欲しいワケじゃなくて! 見ちゃったの、ナイショにしてくれればそれでいいから!」

「ひゅー、パンツただ見せなんて茉莉太っ腹!」

「太っ腹言うなし!」

「あの、言いふらすつもりとかないんで……」

「カズちゃん、やっぱりピンク好きなん?」

「しつけーよ、オマエは!!」

どこか思い詰めた様子で叶衣が尋ねてきた。

「ピ、ピンク!!」

「あーもう、オマエが絶妙なタイミングで余計なこと言うから!」

上級生の余裕を見せていたピンクの主だが、急に顔を真っ赤にしてしまった。

「ほうほう、今日の茉莉はピンクかあ……ちらっ」

「やあっ?! なにめくってんのよ!!」

「ぼ、僕はこのあたりで……」

「ま・ち・な・さ・い?」

にたあと恐ろしい笑みを浮かべたピンク先輩が、オレの肩をがっしりと掴んで離さない。

「先輩は、ふ、不可抗力という言葉をご存知で？」

「もちろん知ってるけど、わたしけっこう感情的なのーうふふふ」

「んだとこのクソアマあ！ 見たくもないもの見せられたのはこっただぞ！ むしろそっちが謝れ！」

「ええええっ!! 急に言葉遣いが荒くなったー!!」

理不尽な世の中には逆らいたい年頃なのだ。

「あら、一春に叶衣。どうしたの？」

「カミ姉！ ちょうどよかった、このぼっちやりが絡んできて！」

「ぼっちやりですって!!」

「事実じゃないの」

「守衿まで！ ていうか、この子たちと知り合いなの!!」

「知り合いもなにも、私の弟と——」

「義理の妹ですん」

「将来の、をつけなさいおまんじゅう」

「お姉ちゃん！ そこは全否定して！」

「守衿の弟!! たしかによく見ると似て……ないっ！」

「えー、きゅーちゃんは似てると思うよ？ 態度とか」

「九、なにか言ったかしら？」

「ご尊大な態度に敬服致します、会長どのお」

「カミ姉、この人たちお友だち？ それとも……もぐもぐ」

「まあ友人よ。それとも、なによ？ なに言いかけたの？ ねえ、もぐもぐしてないで言ってみなさい？」

「守祢の弟に……私のパ、パンツ見られた……死にたい……アンタを殺して私も死ぬう！」

「破廉恥耐性ゼロかよ、この人！」

「まてー！ 待ちなさいってば！ ねえ！ ま、待っててばあー！」

もうなにがなんだかわからないまま、早くも息絶え絶えの姉の友人から逃げているこの状況。

……やはり、オレの勘は正しかったようだ。黒髪美人は変な人で、ピンクの主はこの有り様。極めつけにカミ姉と友人でもはや役満である。もう手遅れのようにだが。

オレがついさっきまで望んでいた青春が音を立てて崩れ去るのを目の当たりにしながら、桜の花びらがひらりと目の前を舞っていくのを、ただ眺めることしかできなかった。